



75年間病氣と無縁の姉が今年がんと診断されました。洋画家として活躍し続けている最中のまさか。青天のへきれきだったでしょう。日常は一変。「つうちちゃん(私)の元気な姿が何よりの見本」と自身を奮い立たせ、薬剤や治療方法を勉強し、「患者力」を高めています。

わたしは術後治療の説明に同席しました。順番を待つ姉の動悸が伝わります。



菊井津多子

が、副作用で今の健康を害してしまうかもしれないという難しい選択で



10月15日に長浜城歴史博物館がピンクにライトアップされます

がん患者は治療を選択できるか

てきます。先生は病理結果や術後治療を説明され、「再発リスクを最大限回避するために抗がん剤を使いたいが、術前で副作用がきつく出たので、抗がん剤をするかどうかを決めてください」と言われました。

再発リスクを回避できず。臨床研究や先生の意見をさらに伺いました。先生は術前治療を副作用でストップして手術したことを振り返り、正直な気持ちをお話してくださいました。最後に、「もし副作用が出た場合は全力で対処します」と長い時間をかけ、良いことも怖

いことも含め科学的根拠をしっかりと伝え、医療者として一緒に考えてくださいました。まるで、医師たちが一つの症例に対して意見を出し合う「カンサーボード」に患者が同席したようでした。

本物。信頼できる」と感じました。姉は「人生に後悔はしたくない。途中でやめることも出来る。副作用にも対処してください」と聞けたので、やっぱり抗がん剤をトライしてみよう」という選択をしました。私は、セカンドオピニオンを受けた方がいいのでは、という考えも頭をよぎりました。

さる主治医の姿から、患者は選択し決断できるという経験をしました。主治医に対する信頼が生まれ、不安な気持ちは安心に変わり、治療を選択し、その結果を納得できるのだと思います。

が、姉のその選択を応援したいと思います。「この次までに治療を決めてください」と、患者に治療の選択を求める最近のがん医療ですが、がん患者には難しいことですね。今回、真摯に一緒に向き合ってく

10月は乳がん月間で、がん検診を受けてください。滋賀県がん患者団体連絡協議会会長／乳がん患者会「あけぼの滋賀」代表